

魅惑

菊村 到



講談社



魅惑

一九六四年二月二十日発行

著者 菊村 到

発行者 野間 省一

印刷所 慶昌堂印刷株式会社

製本所 株式会社大進堂

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽町

電話 東京九四二局一一一大代表

定価 三四〇円

©1964 Itaru Kikumura

落丁本・乱丁本はお取りかえします

目次

第一章	傷あ	と	五
第二章	遊び	相手	二四
第三章	夜のピアノ		四
第四章	暗い告白		四
第五章	唇		三
第六章	廃	墟	一〇
第七章	閉ざされた部屋		二九
第八章	虚構の愛撫		一七
第九章	再会		一七
第十章	記憶の中の風景		一五
第十一章	内部の悪女		一五
第十二章	鏡の中の顔		三四

装
幀
長
尾
み
の
る

魅

惑

第一章 傷 あ と

瀬戸藍子はどういふものか、自分の気持が舞台の上にくりひろげられているシヨウの世界に、少しもとけこめずにいるのを持て余していた。

さまざまに交錯するライトのなかで、水の底の魚のように、どことなく非現実的なげりをとめないながら揺らめいているモデルたちの肢体のほのじろい肌に、彼女はうっとしいものを感じていた。

そのモデルたちの頭は、さまざまなうねりやふくらみ、輝きや影を持った髪でよそおわれていて、ひとりひとりのモデルのそのヘヤ・スタイルについて、甘い舌足らずな感じのする女声のアナウンスが、もっともらしい解説をあたえていた。

去年まではこんなふうでは無かったのに、と瀬戸藍子は思った。去年の秋におこなわれた、このエデン美容スクール主催のヘヤ・シヨウのときには藍子の視線は舞台の上に吸い寄せられ、ひとりひとりのモデルの頭の上を飾る髪の毛の起伏や曲線は彼女の感情にやさしく呼びか

け、何かを揺すりたててくれた筈である。

去年にくらべて今年のショウが見劣りするわけでもないのに、藍子の心は、一向に波立とうとはしなかった。

その原因がどこにあるかは彼女にも判っていた。

要するにくたびれているのだと彼女は思う。

美容師のだけれどもがぶつかる壁と言ってしまえば、それまでだが、確かに今彼女は一つの壁にぶつかっているようだった。

美容師の仕事が、いやになったわけではないし、自分が美容師として無能だとも思わない。

現在つとめているビュウティ・サロン・西岡に特別不満があるというでもない。

経営者の西岡広子はむしろ藍子を可愛がってくれているほうである。

同僚とのあいだに気まずいものがあるわけでもない。

同僚は二十五人もいるが、藍子の仲間受けは決して悪いほうではない。客とのあいだに面白くないことがあるというでもない。

こう考えてみると、藍子の気持が沈まなければならぬ理由というものはどこにも見当たらないのだ。それにもかかわらず、彼女の心は重く沈みがちだった。ヘヤ・ショウを見てもあまり感

勤はおぼえない。

何だか分らないが、とにかくものういのである。

慢性化された疲労状態とでもいうふうなものがこの二十三歳の美容師をとらえている。

舞台の上には、カラー・ヘヤをつけたモデルたちが、しなをつくりながら並んでいる。

「現代は黒髪からまさにカラー時代に移りました。黒い髪のモデルさんに燃えるようなブロードのヘヤ・ドレスをかぶせてみました。この優雅さの中にオリンピックの聖火のイメージを読みとっていただけたら、というのが作者のねがいでございます。制作者は〇〇〇〇、モデルは××××、ヘヤ・ドレスは、▽▽提供でした」

女性アナウンサーの声が甘いムードに乗って流れ、舞台の上手から、制作者がひかえめに姿をあらわすと、スポットライトがそれをとらえ、場内から拍手が起る。

どのヘヤ・ショウにも見られる光景で、藍子には特別の感慨もない。

バイオレット、ピンク、グリーン、コバルト、さまざまな色調のヘヤ・ドレスをかぶったモデルたちが気どった足どりで舞台からエプロン・ステージに順ぐりに進み出る。

「ネープで毛さきをはねあげ……」

「フロントからクラウンにかけての毛さきを大きく右に流し……」

「左サイドから右サイドにかけてのゆるやかなムーブマン……」

「右バックサイドからクラウンへの上昇線は情熱をあらわし……」

「シャギーなタッチに、そよ風を表現してみました」

そんなアナウンスの声が断片的に藍子の耳に流れてくるが、それは藍子の心にとどくまでに、意味を失ってばらばらに吹きちぎられてしまうようだった。

藍子は眼を閉じた。もう何も見たくない気持だった。何もかもが、ひどく空虚なように思われてならなかった。

女アナウンサーの甘ったれ声に乗る空疎な美文調の解説の持っているマンネリズムにも、がまんならないようないらだたしさをおぼえた。

休憩時間になった。藍子は席を立て、ロビーに出た。

そのヘヤ・ショウは都心のデパートの中のホールで行なわれていた。

藍子は、よほどこのまま、帰ってしまおうか、と思ったが、江島健一郎の制作したヘヤ・デザインをどうしても見ておきたいという気持が、それをばんだ。

江島健一郎は、藍子と一緒にこのエデン美容スクールの卒業した男性美容師で、藍子は卒業するとすぐ、いまのビューティ・サロン・西岡にインターンとしてはいい、国家試験に合格し

たあとそのまま引続き、はたらいっているのだが、江島はその技術と感覚を特に校長の相田満枝に買われ、教師として学校に残ることになったのだった。

江島は最近、美容師としてめきめき腕をあげて来ている。藍子はそんな江島に特別な感情を持つてゐるわけではなかったが、同期生としてわりあい、親しくしていた江島のデザインは見とおきたいという気持があった。

それに、自分を今とらえているもやもやしたものについて、江島に語ってみたいという欲求も藍子の心のどこかにひそんでいるようだった。

江島なら今の自分の不安定な、閉ざされた感情を理解してくれるかもしれないという気がした。

すると、藍子はふいに楽屋に江島を訪ねて見ようという心が動いた。藍子が同級生の江島を楽屋に訪問するということは少しも不自然ではない筈だった。

江島だって喜んでくれるだろうと思う。藍子の足はしげんに楽屋口のほうに向って歩き出していた。

その時、

「藍子さんじゃない？」

という女の声に呼びとめられた。

藍子は振返った。そこに久保村美保が立っていた。

「まあ、美保さん」

藍子はほとんど反射的に相手の名前を呼んだ。

久保村美保もやはりエデン美容スクールの同期生であった。

このヘヤ・ショウは、エデン美容スクールの主催したものであり、会場をしめる観客の大半は、エデン美容スクールの出身者であった。

だから藍子が美保と顔をあわせたところで少しも不思議はなかったのだが、藍子にはそれが何となく得がたい偶然のような気がした。

美保は藍子よりも一つか二つ、年下の筈だったが、そんな美保に藍子は圧倒されそうだった。

美保には充分、成熟した女性の持つ充実感のようなものが、全身にみなぎっていた。藍子は美保の前に立つと、自分がひどくみじめに思われてくるのだった。

美保は色が白く、顔だちも派手で、ぱっと瞬間的にひと目をひく強烈な魅力を持っていた。

学校時代からそういう美保の美貌はきわだっていたが、久しぶりに見る今の彼女はさらに洗

練されているようだった。

藍子には美保が別の世界に生きている人間のような気さえた。

美保は、美容師よりも、むしろモデルにふさわしいような恵まれた容貌や肢体を持っていた。

「ひとり？」

美保は訊いた。

藍子はうなずいた。そして美保の少し離れたうしろのほうに三十二、三の和服の美しい女性がこちらを気にしながら立っているのを眼にとめた。

「美保さんは？」

「私は、つれがいのるの」

美保はちらりとうしろの婦人のほうに眼を向けた。

それで藍子にも、その婦人が美保のつれであるらしいことが察しられた。その婦人は、美保をさらにみがきたてたような深い美しさを持っていた。

「何年振りで会ったのかしら、私たち」

美保が言った。

「卒業してから、確か二度目の筈よ、これで」

「そうね、元気？ いま、どこにいるの？」

「ビュウティ・サロン・西岡というお店にいるの」

藍子は店の場所と電話番号を教えた。

美保は手帳にそれをメモした。

それから、うしろの婦人のほうを振返って手招きした。婦人が近づいてきた。

「こちら、私の同級生の瀬戸藍子さん」

そう言って、美保はその婦人に藍子を紹介した。

「こちらはうちのママ」

美保は婦人のことをそう紹介した。

藍子は頭をさげたが、うちのママ、というのが何を意味しているのか、はっきりとは分らなかった。

美保がつとめている美容院の店主ということなのか。その婦人はどう見ても美容師という感じではなかった。

婦人は微笑を浮かべながら、ハンドバッグから小型の女持ちの名刺を取り出した。

それには岩越比佐子という名前の右肩のところに、「クラブひさ」と刷り込んであった。それではじめて藍子にもその婦人が「クラブひさ」という酒場のマダムだということが分った。

「私ね、このママのお店でお世話になってるのよ」

美保が言った。

「お世話に？」

藍子がききかえすと、

「このお店でホステスをしているの」

と美保はつけたした。

藍子はうなずき、岩越比佐子と美保とを何となく見比べるまなざしになった。

「一度、藍子さんも、クラブひさに遊びに来てよ。銀座二丁目の東南ビルの中にあるわ」

美保は言った。

「じゃあ、美容のほうはやめてしまったの？」

藍子が訊くと、美保は笑って、

「あんまり大きな声じゃ言えないけど、お金ためて、そのうちに、どこかで、美容院をひらくわよ。バアにつとめて、パトロンをさがしてるの」

かえって藍子のほうが、どきまぎしてしまっただけだった。

そういうあけっぴろげなところは昔のままであった。

開幕を知らせるベルが鳴ったので、藍子は二人と別れて自分の席に戻った。

美保としばくぶりに顔を合わせたことで、藍子の心は平静さを失っていた。さっきとは別な理由で藍子の心は、舞台の上の世界にとけこめなかった。

藍子は舞台の上とは無関係に自分の想念の中に閉じこもっていた。美保のような生き方もあるのだわ、と思った。

美保の奔放な生活態度が羨しくもあった。美保は自分の思う通りに生きているようだった。美しいからそういうことも許されるのだろうか。

藍子は美保の持っていた、女として成熟するということの美しさについて思いをめぐらした。

美保の生き方を必ずしもいいとは、おもわないが、ああいうふうにも、自分を前面に強く押出して生きて行けたらいいだろうな、という気がするのだ。そういう美保の生き方には学ばべきものがあるようだった。